

山麓通信 37

福岡大学
日本語日
本文学会

会長挨拶

会長挨拶

永井 太郎

会員の皆様、昨年から学科主任をさせていただいております永井です。本来なら、すでに挨拶を済ましておくべきところですが、昨年は三嶋先生の追悼号であったため、挨拶が遅くなりました。

事務処理能力の非常に低い人間ですので、主任がつとまるかどうか不安でしたが、他の先生方の御協力によって、今のところ学科に大きなダメージを与えることなく済んでいます。任期は今年度いっぱい、あまり残っていませんが、よろしくお願いいたします。

さて、今年も会員の皆様には、残念なお知らせをしなければいけません。長年、本学科で教鞭をとって来られた山縣浩先生、高橋昌彦先生が本年度をもって退職されることとなりました。山縣先生は、まだ定年ではありませんが、選択制早期退職になります。

山縣浩先生は一九九九年に福岡大学に着任されました。学科では、「日本語史」「日本語表現法」など、語学系の授業を担当されてきました。特に、「日本語史」は、学生の皆さんには、よくご記憶にあるかと思います。

学科において、山縣先生は誰よりも頼りになる存在でした。僕が福大に来た頃から、とにかく何かわからない時は、山縣先生に任せれば大丈夫、という感じがありました。こうした山縣先生の有能さを、他の学科の先生方も御存じだったからこそ、人文学部長に三期にわたって選ばれたのだと思います。

先生はまことによく周囲に気配りをされる方でもありました。以前、学部の忘年会の幹事をされた時に、同じく幹事だった山田洋嗣先生が、感心して僕にそう仰っていたのを覚えています。仕事がお忙しくて、なかなか行くことがありませんでしたが、訪書旅行の際には、学生のために完璧なエスコートもされていました。

こういうと、真面目一方なようですが（実際先生は真面目ですが）、山縣先生にはどこか「お茶目」なところもありました。とてもきち

んとして、隙がないようなのですが、けっこう隙があったりするので。いつも手にされている、なぜか可愛らしい手提げバックのような感じですよ。

個人的には、福大に来てから様々なことを教えていただき、大変感謝しています。初めて一緒に教務をした時に、時間割の調整の仕事を教えていただいたのを覚えています。書類の提出が遅れては、我慢強く待ってもらったこともあります。学会の司会をする際には、丁寧に行の仕方を記していただきました。さつきは、学科の教員が山縣先生に頼っていたように言いましたが、その中でも僕がその最たるものだったと思います。

先生が退職されると、僕が福大に来た時にいた先生はおられなくなります。思えば、学科の中で最も長い付き合いになります。学部長の激務などもあって、いろいろとお疲れになったことと思います。先生が退職されることは、これまでの卒業生、在校生、教員にとっても、寂しいかぎりですが、これからはゆつくりと体を休めていただきたいと思っています。

高橋昌彦先生は、二〇〇六年に、福岡大学に着任されました。「古典文学講読」「日本文学史」「漢文学講読」など、近世文学、漢文学の授業を担当されてきました。山縣先生と同じく、必修科目の授業を担当されていたので、日文科の学生は皆さん高橋先生の授業を受けて来られたはずですよ。

高橋先生は、穏やかで、優しい方です。こんなことをいうと、先生は、照れて否定されるかもしれませんが、皆さんもそう思われるのではないでしょうか。高橋先生は優しい、と学生が言うのを何度も聞いたことがあります。それも、先生のお人柄が学生にも伝わっているのだと思います。

学科会議などでも、先生の発言は、いつも落ち着いていて、バランスが取れたものでした。先生ご自身は、特に意識しているわけではなかったのかもしれませんが（ものすごく気を使われていたのかもしれませんが）。しかし、先生が持つている、そうした柔かさや、我々教員にも、学生にも共有され、学科全体に安心感を与えてくれていたように思います。業務に関しては、高橋先生の知識と情報は学科において不可欠なものでした。僕も同じ仕事をしていたこともあったのですが、先生ほど正確にその詳細を覚えていたことは決まてありません。山縣先生に加え、高橋先生までおられなくなると、来年から、学科の業務がどうなるのか、少し不安になるくらいです。コロナ前には、よく八階の共同研究室で、梶原先生などと話されていたのを思い出します。まだ國生先生がおられたころには、学生時代の國生先生の話を伺ったこともあります。山縣先生、國生先生、高橋先生は同時期に九大の大学院におられたことです。お互いのエピソードを聞くと、学生時代の先生方の

様子が見えるようでした。

先生は、いつも会った時に、「おっ」という声を出して、挨拶をされます。それを聞くことが出来なくなるのはとても残念です。これを読んでおられる卒業生や在校生の皆さんも、同じ気持ちではないでしょうか。幸い、お体の具合が悪いとは伺っていないので、時間が出来れば、古本屋などを巡ってゆっくり過ごしていただきたいと思います。

最後になりましたが、もう一つ、悲しいお知らせをしなければいけません。本学の教授であった清水孝純先生が、四月に亡くなられました。

清水先生は、高名な比較文学者であり、二〇〇〇年に本学を退職されました。僕は先生の後任にあたります。退職後は、しばらくの間、大学院で授業をされてきました。

学科で開いていたいただいた、僕の歓迎会が、清水先生と出会った初めでした。三嶋先生と同様に、清水先生も、以前から名前だけは存じ上げていたので、隣に座って緊張した記憶があります。

それから、大学院の飲み会などで、何度かご一緒させていただく機会がありました。清水先生は、気さくな方でした。誰とでも、にこやかに、楽しそうに話されました。その様子は、ポップな、と形容したくなるほど、軽やかでした。間違いなく、深い学識をもった「大先生」なのですが、決して、そんなそぶり

を見せる人ではありませんでした。先生は、自由人だったのだと思います。先生は、軽やかなフットワークで、知識の世界を開拓していかれた方でした。

大学院の授業もされなくなってからも、先生はよく大学の図書館で勉強されていました。大学に本があるのだから、そこで読める本は持たないようになっている、とそんなことを仰っていたように覚えています。ある時には、山本七平なんて読まなかったけど、読んでみると面白いね、と仰っていました。その時、先生はすでに七〇代の後半になっていたか、八〇歳を越えていたと思います。それでも、先生は勉強し、貪欲に自分の知識を広めようとしていました。自分にそんなことが出来るでしょうか。頭の下がる思いです。

先生の計報は、國生先生から知らせていただきました。ご子息の清水御狩さんに連絡を取り、最後の様子を少し伺いました。たいへん安らかな最期だったとのこと。先生の御冥福を心よりお祈りします。

清水先生の思い出

大嶋 仁

清水先生に最後に会ったのは二年以上前のこと。城島印刷の仲西社長に付き添われ、今泉のあたりを歩いておられた。足どりはゆっくりで不確かであったが、なにしろ大変な高齢である。たいしたものと思った。そういう私も、今や「高齢」であるが。

こちらが挨拶すると、いつもの笑顔で「いやあ、近頃はバイオリンがなかなかうまく弾けなくてね」とおっしゃる。「先生、相変わらずだな」と嬉しく思った。

そういえば、私が福大に勤務し始めたその年の冬、野芥のお宅に招待してくださったことがある。当時健在だった奥様の手料理をいただいた後で、先生がさっそうと一曲奏でてくれた。上手とは言えなかったが、なんの術もなくさっさと弾いてしまうところが妙で、この人、気さくで、あつけらかんとした人というふう思った。

野芥のお宅にはピアノもあったかも知れない。時々ピアノの前に座って、何かを奏でている先生を想像した。それにしても、あのバイオリン。いつ、どのようにして覚えたのか。「ほか、自己流でさ。習い事は嫌いなたち

よ」という先生の声がある。「朝起きると体操をして、それから音楽、それから食事」そういう声もする。先生の声はいつも明るかった。前述の仲西さんとは懇意だったようで、奥様が亡くなったあとの先生宅を、仲西さんがしばしば訪ねていたと聞く。そんなとき先生は決まって体操をしていたり、バイオリンを弾いたりしていたそう。先生は単なる「趣味人」ではなかった。自分を律することを知らず、強い意志の人だった。

自分を律するといえば、福大を退職したのちも毎日のように福大図書館に通い、勉強を続けておられたのが先生である。時には机に頭をもたせて昼寝されていたという話を、日文出身で図書館勤めの某女子から聞いたことがあるが、それでもすごい。昼食時になると図書館から第一食堂へ向かい、そこでしっかりと食べる。たまに同席すると、「グラナダで開かれたドストエフスキー学会で発表したんだが、なにしろ町が素敵だね。ああいうところに住んだら、毎日飽きないだろうな」とおっしゃっていた。体力はだいぶ落ちていたはずだが、精神がいつも若い。私もそれにあやかうろうと思った。

清水先生との初めての出会いは、私の福大への就職が決まって人文学部長に挨拶に行ったときのことである。同じ比較文学の間としてそれ以前にも学会などで会っていた

はずだが、どうしても思い出せない。

一九九四年六月、私はまだパリの国立東洋語学校に勤めていた。ある日、太い墨字で「清水孝純」と書かれた白い封書が日本から届き、なんだろうと思って開けてみると、「福岡大学の比較文学のポストに応募してほしい」と書いてあった。パリでの生活もマンネリ化し、給料も低く、通訳などのバイトで食いつないでいた時だった。「これはチャンス」と思い、迷わず「喜んで応募します」と返事を書いた。

就職の話はその後順調に進み、清水先生から「学部長面談があるから福岡へ来てほしい」という手紙が来た。急遽帰国することになり、東京に着くや国内線の便に乗り換えて福岡へ向かい、そのあとは地下鉄とバスを使って福大にたどり着いた。

やっと文系センターに着くと、受付で清水先生に連絡してもらった。エレベーターで八階に上ると、先生がドアのところで待ち受けていた。そして、「お久しぶり」と一言。私の方は、「ああ、この人が清水さんなんだ」と合点した。

この出会いで忘れられないのは、先生が私に関する書類一切を自宅に置き忘れてきたことだ。就職はすでに決まっていたのだから、書類など必要ないかに思えるが、事務手続きには必要だったのだ。そういう大事なものを家に忘れてきたとあれば、学部長面談の開始が遅れるのも無理はない。先生は慌てて自転

車を走らせ、野芥の自宅に向かった。

当時の日文の主任は旧満洲国で生まれ育った、おらかな藤井茂利先生だった。清水先生が書類を家に取りに行っている間、ニコニコしながら「ビールでも飲みましょうか」という。まさかと思っている私を文系センター最上階のスカイラウンジに連れて行ってくれた。私は下戸で、しかも午前中、面談前である。とてもではないが、「ビールなど飲めません」と断った。ラウンジからの油山が美しかったのを覚えている。

清水先生が書類を抱えて戻ってきたので、いよいよ学部長室へ出向いた。学部長はこちらの挨拶をろくに聞きもせず、「よくいらっしやう。大事なのは健康と給料です」と言い放つ。すると、事務長が小さな紙切れを私に示し、そこに年俸額が書いてあった。これで面談終了。学部長にすれば、開始時刻が遅れた分を取り戻したかったのだろう。

年俸額を見せられても、その額でどれほどの生活ができるのか、見当もつかなかった。パリに長くいたため、日本の生活事情、とくに福岡の生活というものがわからなかった。しかし、漠然ながら、パリよりマシな生活ができるだろうと思った。

面談が五分で終わったので、再び清水先生の研究室に戻った。先生はなにか落ち着かない様子だったが、私は遠慮なく色々質問した。とくに住居のことなど。

今であればスマホを見てさまざまな情報が入るのだが、なにしろ三〇年前のことだ。先生は「天神あたりに行けばおいしいものがあります」と言うのだが、その天神がどこかわからない。当時は地下鉄七隈線がなかったから、バスで天神に向かった。

道中、「この大学はずいぶんと呑気で、これなら自分のような人間でも勤められそうだ」と思った。清水先生、藤井先生、ぶつきらぼうだが飾り気のない学部長……。私はその日一日幸せだった。

私が福大に赴任した当時、清水先生は比較文学会九州支部長だった。そういうわけで、「九州を盛り上げてくださいよ」とすぐさま学会活動に参加させられた。とても気楽な学会で、そこがこの学会の取り柄だと今でも思う。

学会には二種類あって、非常に専門的な精緻な議論をするのもあれば、同好会的な雰囲気のものもある。自然科学や社会科学の学会は前者でなければならぬだろうが、何が真実であるかを客観的に示すことの出来にくい学問の場合は、後者でよいのではなからうか。比較文学会は自ら後者を任じており、文学芸術への愛情と尊敬を会員が共有できれば、それで成功と考えている。

清水先生はそのような学会の空気を維持しつつ、つねに新風を注ぎ込むことを怠らなかつた。真面目くさったことは「野暮だ」と

心得ていた先生は、いつも飄々としておられたが、それは外見で、かなり細かいところにも気をつかう繊細さを隠しもっていた。その繊細さは、先生の近くにいた人が亡くなった時に先生が書いた追悼文などに表れている。

私が福大に赴任してから半年後であったか、冬の支部大会で「一時間の講演をしてくれ」と先生に頼まれた。題目は「構造主義について」ということで、「支部に知的な刺激を与えてほしい」というのであった。責任が重いとは思ったが、ほとんど支部の面々を知らなかつた私である。一度は顔見せねばならなかつた私である。

とはいえ、最近になってようやく構造主義のなんたるかがわかってきた私だ。三〇年前になにをしゃべったのか、心もとな。ともかく、私の話が時間通り終わったとたん、ある年老いた広島大学の先生がいきなり立ち上がった。今日の話は陳腐なことだらけで、少しも啓発されなかつた」と。

すると、当時は熊大所属の若き西成彦さんが、「そんなのが質問なのか！失礼だぞ」と怒り出した。するとそこへ割って入った清水先生、「今日の大嶋さんの話は、陳腐でもなんでもなく、多くの人が構造主義に疎いことを知って、わざとレベルを下げての話なので」と霧閉気を和らげようとしたのである。

面白かつたのは、そのあとである。清水先生は勢いに乗ったのか、滔々とミハイール・パ

フチン論を展開しはじめた。日本文学もロシア文学も大好きという先生、ソ連における構造主義の話をおそらく一〇分以上も熱を込めて語った。パフチンの名は知っていてもその論は知らなかった私には、たいへん勉強になった。

これが当時の比較文学会の雰囲気であって、おそらく今はもうないだろう。皆が好き勝手に言いながら、それでも何かを共有していた。今になって思うのだが、清水先生は飄々としていたようにたいへん真面目な人で、文学への熱情は激しいものがあつた。入試検討会でも、古典文学の山田洋嗣先生とおよそ三分ほどの文学論争を展開し、両者互いに譲らずという有様だつた。なんの議論だつたか覚えていないが、「文学とはなんぞや」といった根本理念についてだつたと思う。福大日文の世界にこういう面白さがあつたことは、それを知らないかもしれない世代のために、あえて言っておく。

面白いことなら何にでも興味を持つという「面白好き」は、清水先生にビタリと当てはまる言葉だ。比較文学の全国大会で、先生がシンポジウムのパネリストになったことがある。先生は漱石のことを話したと思うのだが、それを聞いていた隣の婦人が「清水さん、万年文学青年ね」と言つた。そう言う本人がそれほどに「成熟」しているのか、と疑問に思っ

た私は、「文学青年」よりは「文学の恋人」と言うべきだろうと思つた。

それにしても、スタイリストだつた。東京は深川の生まれというから当然かも知れない。繊細さを隠し、呑気を装い、実際に呑気な面もあつたが他人を気遣う。牛込の漱石より、両国育ちの芥川にいつそう近かつたのではなか。

先月、東京にゆく機会があり、隅田川沿いの道を歩いていて清水先生を思つた。「故郷を失つた」東京人が、九州という文化の根づいた地に、鎌倉というエセ文化の町で育つた私を招いてくれた。これについては、「先生、ありがとうございます」と言うほかない。

(日本語日本文学科元教員)

お昼の学食談義

— 清水孝純先生の思い出 —

森 茂暁

一、出会い

清水孝純先生(以下、清水さん)は、一九三〇年(昭和五)一月二三日の生まれ。今年二〇二四年(令和六)四月三日に亡くなられた。行年九四才。私は清水さんと所属も専攻も全く異なるが、ふとした縁で仲良くなり、特に晩年の清水さんに親しく接した関係から追悼文の寄稿を求められた。以下に私の清水



ヴェルサイユ宮殿にて(昭和52年)

さんに対する思い出を綴ることとしたい。

私が山口大学から福岡大学へ移ったのは、一九九七年（平成九）四月のことである。清水さんはすでにその五年前には九州大学教養部を定年退職されて福岡大学に来ておられた。同じ人文文学部所属とはいえ、学科が異なるし研究室も階が違うので、ご一緒することにはなかった。ときどき東側のエレベーターの前でお会いしたときに、ちよつと立ち話をする程度だった。

ひところ九大教養部には非常識な教員たちがいて、私は採用人事で職業差別にあつた苦い経験があるので教養部にはよい印象はもっていなかったが、清水さんはそういう政治的なグループとは無縁の人だった。清水さんは私の話を聞いて、「むしろ（教養部に）行かなくてよかつたかもね」と言われた。この一言で清水さんが偏見のない自由人であることがわかつた。

二、学食での楽しい語り

以降、それ以上の付き合いはないまま時間は過ぎ去り、この間の二〇〇〇年（平成一二）に清水さんは福大を定年退職、二〇〇七年（平成一九）には退職後なさつていた同大の非常勤講師も引かれた。その後十年余の間、私と清水さんとの接触はほぼなかつた。二〇一二年（平成二四）には、清水さんは最愛の奥さんを亡くされている。



左：森茂暁先生 右：清水孝純先生（令和二年ころ）

今では記憶がおぼろげなのであるが、私と清水さんとの接触が再開されるのは、私が定年を迎える二〇二〇年（令和二）の数年前からのように思う。私は在職中から昼食は学食でとるのが常であつたが、清水さんもそのころには週に数回、お昼だけは学食に顔を見せられ、居合わせたもと同僚たちと一緒に食事をなさつていたように思う。

かくして私と清水さんは学食をとる二十分くらいの時間だけ世間話を重ねているうちにだんだん親しくなり、学食で会う度にいろいろな雑談をするようになった。話の内容はと

りとめもないことばかりであつたが、ご専門の関口の広い比較文学の研究のことはむろん、清水さんの生い立ち、幼少時代、学生時代のこと、日大をへて九大に移られた経緯、九大での研究生生活のこと、ヨーロッパでの在外研修のこと、奥さんや三人の息子さんたちのこと、城南区野芥のお住まいのこと、同門の同窓会のことなど、話は多種多様で変幻自在であつた。お話を聞いていると、私みたいな日本中世史という実に狭い専門分野の勉強しかやっていない者としては、たいへん興味深く有益なことばかりであつた。

学食のことというところ、学食に昼食をとりにくる人たちのなかで最も高齢であることは一目瞭然であつたので、みんな清水さんには敬老精神でもって優しい気持ちで接していった。あの清水さんの飄々とした温顔をみて、自然とそうなのも無理はない。最後のころには、食堂のおばさんが食事をトレイにのせて清水さんの席まで運んでくれたり、しばらく清水さんが顔を見せない、「どうなさつていますか」と尋ねられたのもだった。このように、みんなから好かれる気さくな清水さんは市内の文学愛好者たちに請われて、長く読書会もやつておられた。

清水さんは、ご自身の健康維持のために、運動をかねて学食に来ておられたようだ。野芥のご自宅から西鉄バスに五分くらい乗って福大病院前で降り、福大病院の正門から構内

に入り、病院新館の一階通路を通って市営地下鉄の改札口前を経由して、エスカレーターで地上に出て、福大正門から学内に入っておられた。ときには薬学部の葉草園の入口から入られたとみえて、葉草園に落ちていたカラタチの実をいくつか拾ってこられたこともある。黄色く熟れたカラタチの実に目をとめその興趣にひたるところなど、清水さんが季節の風情を理解することのできる豊かな感性の持ち主であることのおかしである。

学食で昼食が終わったあと、いつも清水さんが言われていたのは「これだけ食べとけば大丈夫」という言葉であった。これで一日分の栄養はとれるという意味だ。ときに学食の一階は工事などで閉鎖されることがあった。そういうときは階段を上って二階に行かねばならなかった。清水さんは自力で十数段もある階段をゆっくりと登られた。それがまた運動にもなった。

学食で食事が終わると、そのまま学生課側の出口から出て中央図書館へ行くというのがお決まりのコースであった。途中木々や芝生が植えられた憩いのスペースがある。その芝生のうえを歩きつつ、ちょっとした散歩気分を味わいつつ図書館の入り口に着き、そしてここでおさらばということになる。

清水さんは、つねに研究のテーマを持っておられ、中央図書館では四階の決まった席で読書に熱中しておられた。ときには居眠りし

ておられたが、図書館カウンターの末松さんは心配して、ときおり清水さんの様子を見に行かれたという。図書館の蔵書をよく利用されたようで、いつも返却するための図書館の本を数冊手さげ袋に入れて持っておられた。

三、多趣味で多才の自由人

清水さんが長年勤めておられた九大教養部は中央区六本松にあった（今は改組のうえ西区に移転）。その六本松には護国神社があり、この神社に近い草香江に住んでいる私は、ここ数年、一月二三日の直前にお守りを手に入れてそれを清水さんに差し上げて「長寿」を祈念してきた。今年も例年通り護国神社のお守りを準備して、清水さんが学食に來られるのを待ち構えていたが、それはついに清水さんにお渡しすることができず、いま寂しく手元にある。

清水さんはひどく暑かったり寒かったりする日は、学食に來るのを控えておられた。私がか心配してメールすると、しばらくしてから「元気に執筆しています。そのうち学食にゆきます」との返事があり、ホッとしたものであったが、やはりこの自宅こもりの期間に体調を崩されたのであろうか、二〇二二年（令和四）の後半くらいからめっきり学食に來られる回数が減り、やがて途絶えてしまった。その様子に、いつもの学食の面々は「清水先生はどうなさっているのだろう」と言い合った。

この文章を書くために、ここ数年の清水さんから頂いた年賀状をしらべてみた。そして一番最後のものは、二〇二二年元旦の年賀状であることがわかった。それには自筆で左のように書かれている。まさに青年である。「新しい年！ 新しい年！ 今年も頑張ろう！」

2022年元旦 清水孝純（印）
いつも学食で ごいっしょ出来て、有難いことですネ。本年もよろしく。

この春には 新たな拙著が出そうです。「清水さんは、東京都深川のお生まれで、清水さん二八才のとき亡くなられた父君は大手貿易会社の重役だったと聞いたように記憶する。清水さんは幼少のころにお母さんを亡くされ、家族関係でご苦労されたともお聞きした。若いころ大病をされたそうだが、旧制一高卒の最後で、東大院卒という輝かしい経歴の持ち主なのに、いっこうに飾ったり自慢されたりすることはなかった。

ご自身人生を謳歌しつつ、淡々と日本近代文学・ヨーロッパ中世文学・ロシア文学の比較研究にいそしまれ、多くの著作をあらわされ、研究史に大きな足跡を残された。その功績は大きい。清水さんの趣味は多彩で、自らピアノを弾いたり、クラシックを聴いたり、高尚な趣味の持ち主だった。かと思うと、日本の懐メロの話で盛り上がったこともある。いつか清水さんが言われた「自分は財産は

もらえなかったが、その代わり自由を得た」の言葉は、清水さんの生き方を象徴しているようで私の胸からはなれない。

四、私家版『わたしの欧羅巴』

清水さんを見事に知るための書物としては、一九九二年（平成四）三月、九大教養部の定年退官の記念として、福岡市の城島印刷から自費出版された『わたしの欧羅巴』（欧羅巴とはヨーロッパの当て字）が最もよくできている。写真がふんだんに使われているのがとてもよい。タイトルの文字は毛筆で書かれており、またヨーロッパを「欧羅巴」と表記するところなど、いかにも日欧の比較文学研究者らしい。

なかでも学生時代の親しい仲間との写真、ヨーロッパ研修の際のものは、清水さんの若きよき時代を髣髴させるし、ことに「八歳の時、家族と新年に」とのネームをもつ、ほのぼのとした雰囲気のご家族の集合写真は、清水さんの長い人生のなかで心の奥底にあった風景だと思くと、万感胸に迫るものがある。ときは一九三八年（昭和一三）である。

またご自身の見事な街風景のデッサン、お子さんの絵などが載せられていて、清水さんの文才・画才やご家族を思う優しい気持ちなどがこもった、ご家族の履歴書としての性格を持っている。なお、同書にはご自身の写真もある。在外研修の末期、一九七七年（昭和

五二）にフランスのベルサイユ宮殿の庭にて撮影された写真（冒頭に掲載）は、清水さん四七歳のときのもの。

（歴史学科元教員）

教員通信

不言不語

山縣 浩

漂流五〇年、一時期田代栄助になったが、井上伝蔵で終われそうである。この先は、伝蔵として風狂に生き、志半ばにして逝ったより年若な方々、山部順子・塩ノ谷英子・福井裕・仲田龍祐・森脇茂秀、そして田中勝先生・宮野真生子先生を想いつづけたい。

秩父困民党総理・田代栄助 辞世

振りかへり見れば昨日の影もなし

行くささくらし死出の山道

秩父困民党会計長・井上伝蔵（柳蛙）

想いだすことみな悲し秋の暮

秋どこへ行くぞ錦をぬぎ捨てて

梯おちかの眼にちらつくやたま祭

『閑吟集』

なにせうぞ燻いもんで一期は夢よただ狂へ

注

秩父事件ちちぶじけん 明治十七年（一八八四）十一月上旬に、埼玉県秩父郡を中心として起こった

農民蜂起事件。その始まりは、同十六年末に上吉田村（秩父市）の高岸善吉と坂本宗作、下吉田村（秩父市）の落合寅市の三人

が、借金の据え置きと長期年賦返済を高利貸が認めるように秩父郡役所に願ひ出たことである。ただ、郡役所は私的貸借関係には介入しないとして受け付けなかった。その後、井上伝蔵も加わり、翌十七年初めにかけて請願をくり返したが拒否された。同年八月十日以降、彼らは活動を再開し、九月に入り加藤織平と田代栄助を幹部に迎えて秩父困民党の指導部が形成された。同月七日、負債の十カ年据え置きと四十カ年賦返済を債主に迫ることなどの要求四カ条を決定した。困民党の組織は秩父郡下に広がったが、債主たちが交渉を拒否し続けたことから、十月十二日、武力行使を決定した。その後、早期の決起を求める声が高まり、田代と井上は準備不足を理由に延期を主張したが抑えきれずに、同月二十六日の会合で、決起日を十一月一日と決めた。十月三十一日夜から郡下の農民たちは下吉田村の棕神社に集結を始め、田代らの幹部も困民党の役割表を決めた。十一月一日、困民党は甲・乙兩隊に分かれて、高利貸の家屋を破壊・焼棄して、証書類を焼却しながら進み、小鹿野村で合流した。二日、大宮郷で高利貸のほか、郡役所・裁判所・警察署をも襲撃した。翌三日、甲・乙・丙の三隊に分かれ皆野村に進んだが、すでに鎮圧のために警察のみならず憲兵隊も投入され、その交戦でかなりの死者・負傷者を出した

ことや、行き先をめぐって幹部の意見が分かれたことなどから、田代と井上が本陣を離脱し、加藤と高岸らも去ったことから本陣は解体した。その後、大野苗吉らに率いられた約五百人は、北方の児玉郡方面に向かい、四日夜、金谷村で鎮台兵と交戦したが、約一〇〇人の死者を出して壊滅した。また、菊池貫平・坂本宗作らに率いられた約一二〇人は、五日、屋久峠を越えて群馬県南甘楽郡の神流川流域の村々を経て、七日、十石峠を越え、長野県南佐久郡に進んだ。そこでは同郡の者二、三〇〇人も加わり、大日向村（南佐久郡佐久穂町）・穂積村（同郡小海町）・小海村（同）の高利貸や銀行を襲ったが、九日未明、穂積村東馬流で高崎鎮台兵と交戦して十三人の死者を出した。その後、伊奈野文次郎に率いられた約二〇〇人は、海ノ口村（南佐久郡南牧村）を経て野辺山へ向かったが、憲兵隊に追われて潰走し、約十日にわたった事件は、そこで終わった。その逮捕者・自首者は、史料により記載に違いがあるが、埼玉県では約三四〇〇・三六〇〇人、群馬県で約三〇〇〇人、長野県で約六〇〇〇人である。その大半は罰金科料で済んだが、約一六〇〇人が重罪裁判所での裁判で、死刑、有期徒刑十五年・十二年、重懲役十一年・九年、軽懲八年・六年、重禁錮五年以下に処せられた。死刑は、幹部七人（ただし井上伝蔵・菊池貫平は欠

席裁判）と巡査殺害の二人の計九人である。他に二人が警部殺害で死刑となったとされている。無期・有期徒刑の九人は樺戸・鉞路集治監に送られたが四人は獄死し、懲役・禁錮刑の者は浦和・熊谷監獄に入れられ、うち二十数人が獄死した。また、憲兵隊・鎮台兵・警察との戦闘で三〇〇人を越える死者を出し、警察の側でも警部補一人、警官三人が死んだ。このほか、行き倒れの死者が一〇余人いる。負債農民騒擾から出発しながらこのような大事件になった理由としては、自由民権運動との関連が見逃せない。秩父では、明治十七年初め、自由党の大井憲太郎が来て演説会を開いた後に、二十人が自由党に入党したが、その中に高岸・坂本・落合・井上も名を連ねた。そして、彼らが中核となって作られた困民党には多数の負債民が加わり、蜂起には数千人の農民が参加した。それらを踏まえれば、この事件を在地自由党員が負債に苦しむ多数の農民を組織して専制政府と戦った武装蜂起事件と捉えることができる。また、専制政府と戦い立憲政体の実現をめざすという言説を取り出して、それを困民党の目標とすれば、自由党急進派の思想に通じる。そのことから、この事件を「自由民権運動の最後にして最高の形態」（井上幸治）とする評価もある。しかし、この事件は、主に言論活動を通じて天賦人權と三権分立に基

づく立憲政体の樹立をめざしていた自由民権運動では、かなり異例のものである。特に、多数の者を結集する際に、「一戸一人ずつ出よ」とか、「出なければ殺す、家を焼く」とか言って脅迫し、強制したことは、近世の一揆を踏襲したものであるが、共同体規制であって、近代的政治運動の参加形態ではない。さらに、農民たちの言説には、自由党に入れば負債をはじめ諸税・徴兵の負担からいっさい自由となるという自由党への期待や、「板垣公」に率いられた自由党の「世直し」に参加しているという集団の心性が見られた。その期待や心性は、武力で公権力に対抗する彼らに正当性を与えるとともに、未知の力を引き出させることになり、憲兵隊との銃撃戦を展開したり、郷里を一週間以上も離れて戦い続けたりすることを可能とした。また、彼らを導いたものが、「世直しの神」のように蜂起という非日常的な精神的昂揚の時にのみ幻視できる非実態的なものではなく、自由党や板垣であったことは、この事件が一揆とは異なり、自由民権期の民衆蜂起であることを示している。しかし、それは事実とは異なる幻想であり、実現することはありえず、この事件は負債問題の暴力的解決をはかった蜂起事件として終わった。

〔参考文献〕 井上幸治他編『秩父事件史料集成』、戸井昌造『秩父事件を歩く』、稲田雅洋

『日本近代社会成り立ち期の民衆運動』、井上幸治『完本秩父事件』、秩父事件研究顕彰協議会編『秩父事件』(稲田雅洋)《平成二十二年七月》田代栄助、一八三四・八五 秩父事件の指導者。天保六年(一八三四)八月十四日、武蔵国秩父郡大宮郷字熊木(埼玉県秩父市)の旧家に生まれる。貧民の救済に尽力していたことから近隣の信頼が厚く、明治十七年(一八八四)九月、秩父困民党の指導者に迎えられた。その後、困民党では武力行使を求める声が高まるが、準備不足を理由に、井上伝蔵とともに決起の延期を説いた。

しかし、それを抑えられずに、十一月一日に決起し、総理に就いた。困民党は下吉田村・小鹿野村・大宮郷などを制圧したが、田代は、憲兵隊が投入されて鎮圧が強化されたことや、困民党内部の方針の違いなどから、同月四日、皆野村の本陣を出て山中に潜伏した。しかし、十四日夜、黒谷村(秩父市)の知人の家で密告により逮捕された。翌十八年二月十九日、死刑の判決を受け、五月八日大審院への哀訴が却下されて刑が確定し、同月十七日、熊谷監獄で処刑された。五十二歳。

〔参考文献〕 井上幸治編『秩父事件史料集成』一、高橋哲郎『律義なれど、任侠者』(稲田雅洋)《平成二十二年七月》

井上伝蔵、一八五四〜一九一八 秩父事件の指導者の一人。武蔵国秩父郡下吉田村(埼玉

県秩父市)の商家「丸井 井上伝蔵店」の六代目。安政元年(一八五四)生まれる。明治十四年(一八八二)十月、下吉田村の筆生となり、同十七年初め、自由党に入党する。同年八月、高岸善吉・坂本宗作・落合寅市らと上・下吉田村を中心に困民党を結成したが、その後、困民党が秩父郡下に広まり、武力行使を求める声が高まる中で、田代栄助らと準備不足を理由に延期を説いた。しかし、決起論が強まり、困民党は蜂起を決定し、井上は会計長に推された。十一月一日の蜂起後、小鹿野、大宮郷から皆野村へ進んだ後、同月四日、田代らと本陣を出て、山中に逃れた。その後、下吉田村の知人の土蔵に約二年間潜伏するが、その間、欠席裁判で死刑を宣告された。やがて北海道に逃げのび、伊藤房次郎と名前を変え、石狩町で家庭を持ち、二男三女を得た。その後、札幌市、野付牛(北見市)などに居住したが、大正七年(一九一八)六月、自分の過去を家族に語り、同月二十三日、死去した。六十五歳。郷里の秩父市下吉田に墓がある。

〔参考文献〕 新井佐次郎『秩父困民軍会計長井上伝蔵』、井上幸治『完本秩父事件』(稲田雅洋)《平成二十二年七月》

※『秩父事件』「田代栄助」「井上伝蔵」の項目の引用は、すべて Japanknowledge Lib『国史大辞典』による(傍線は山縣)。

◇その他の参考文献

浅見好夫（一九九〇）『秩父事件』言叢社

黒沢正則（二〇二二）『広域蜂起秩父事件

群馬人が秩父を動かした・世界遺産

『高山社』まつやま書房

中嶋幸三（二〇〇〇）『井上伝蔵 秩父事件

と俳句』邑書林

八木静子（二〇二二）『小説秩父事件 伝蔵

困民党会計長』まつやま書房

（日本語日本文学科教員）

退職を迎えて

高橋 昌彦

令和七年三月をもって、無事定年退職を迎えます。十九年という歳月、勤めあげたこと、何よりも安堵の気持ちでいっぱいです。言い古された表現ですが、長いようであつという間の期間でした。その間、関わった皆さんに深く感謝いたします。

かつて「福大はつまらなくなつた」と言い残して、早期に退職された先生がおられたという話を伺いました。わたしが任についたのはその後になりますので、つまらなくなつた職場とは知らずに紛れ込んできた一人ということになります。しかしながら、それまで某短大に奉職し、満足に研究もできず、年間百回以上の会議に参加させられていた身にとって、この職場は極楽浄土に生まれ変わったかのような場所でした。もつとも、職場側は私の採用を歓迎していなかったかもしれませんが、四月一日に入居した研究室は、綿埃が舞い、壁紙が剥がれ、ブラインドの紐はちぎれ、天井の蛍光灯は点滅を繰り返して、本棚は無造作に部屋の中央に並んでいました（ちなみに前任者の葉巻の甘い残り香も満ちていました）。こんなものなのだろうと思ひ、福大最初の仕事は、窓を全開にして（風にブラインドを揺らしながら）の研究室掃除とあいなりました。

客や学生が来ても座る椅子もなく、早速に机と椅子の購入を申請したところ、事務方に止められ、五階に余っている応接セットがあるからと、古びた一式が運び込まれました。これまた、こんなものなのだろうと思ひ、新しい環境に早く慣れるのが先と過ごしていきました。後々、周りの研究室が空いた時に、掃除が入り、床にワックスが塗られ、壁紙も貼り替えられ、本棚も奇麗に並べられたのを偶目して、自分との扱いの違いに愕然とした次第です。そんなこんなで極楽浄土の薄皮は少しずつ削がれていきました。

誤解なきように述べておきますが、同僚や学生諸君との交流は楽しいものでした。一年目のゼミ生は一人、二年目は二人、三年目は三人もしくは四人かと思つていたら、一気に八人まで増え、その後は五人〜十人の間でほぼ推移していきました。江戸文学などという高校まではほとんど縁のない分野を選んでもらえたことは、本当に感謝感激雨あられと言えます。社会に出てから、くずし字を読むことなどないかもしれませんが、何か大学で学んだ証となることを身につけてもらえればと、架蔵の汚い写本や版本をテキストにして続けてきました。だが、もはや時代遅れの烙印が押され、学生にとって「つまらなくなつた」のか、ここ二年は見向きもされなくなりました。アフターコロナにはそぐわないのか、学科スタッフの若返りが進み、単に年寄りの

教員が避けられたのか、いずれにせよ、退き時というものがおとずれたとあらためて実感しております。

人は急激な変化には対応できない、無理に対応すれば必ずひずみが生じるものなどと言うと、やはり時代遅れと揶揄されそうです。が、運悪くというべきでしょうか、その変化のスピードが加速してしまったのが、ここ十年ほどでした。仕事は以前に増して回ってくるようになり、お上のお達しとやらが年々浸食して、補助金という人参のため無駄に駆け回る馬車馬へと化していく。特にコロナ騒動がそれに拍車をかけました。きつとオンライン、リモートと楽になったのではと思われる方もおられるかもしれませんが（実際、一部にそのような人がいるのも事実です）が、逆にその負担を被る人もいることを忘れてはいけません。出勤時間が増え、仕事もこんなことまでと愚痴りたくなるほど増加しました。コロナの禍中、通勤の足となった自転車は、二〇一九年の年末に購入し、二〇二三年八月に乗り潰れました。パンク修理に持ち込んだ自転車屋で、チューブは勿論、タイヤそのものが摩滅し、スポークも折れ、ブレーキは効かずと次々と問題箇所が見つかり、修理するより新車を買ったほうが安いですよと呆れかえられました。感染を避けるための往復一時間半のペダル運動は、皮肉なことにかえて肉体的に健康になったともいえました。但し、パ

ソコンの過度な使用で見事に五十肩（いや六十肩）になり、右手が挙がらない状態での健康という謎めいた状況でもありました。一方、毎日出勤することで、必ずコーヒーブレイクに集まる仲間が増え（日文以外の教員ですが）、マスク越しに談笑することで、対話の機会を維持し、かろうじて精神的な安定を保つこともできました。どなたにとっても大きな変化だったのではないのでしょうか。

さて、ようやくコロナ騒動も落ち着いた時には、もう以前とは別物の大学になっておりました。知識はスマホに任せ、人間はそれ以外のことをやればよいなどともっともらしい論理が、学内でも幅をきかせ、学生たちは授業中にスマホをさわり、板書もとらずに写真を撮るといふありさま。無論、学んだことを踏まえてそこから独自に進めるのであればよいのですが、自家菜籠中は死語となり、知識は身につかず、授業は聞いていないために板書の内容も理解できない、まるで人間を愚かにするために作られた道具に遊ばれているようにしか見えないのは、やはり年をとったからかもしれません。人に代ってAIが考えるという夢のような時代を迎えようとしているのですから。丁度よいタイミングで、退職を迎えることができたと喜ぶべきなのでしょう。

あらためて、多くの皆さんに支えられた福岡大学での教員生活でした。元気なうちに退

職して、これからは手元にある和本でも読みながら、のんびりと研究を続けていきたいと思っております。老兵は死なず、只消え去るのみとやら。本当にありがとうございました。

（日本語日本文学科教員）

山縣先生をお送りする

江口 正

山縣浩先生は今年度をもって早期退職を選んでご退職になります。先生は二〇〇〇年に福大に赴任ですので、二十四年間福大日文科の教育に携わってこられたことになりました。

学科教育における山縣先生という、「日本語史」に触れないわけにはいかないでしょう。他の科目はもう忘れたという卒業生も、この必修科目にはいろいろな思い出があるはずで、多くの学生が一発では通らないため何年もかけて履修することが普通になっている必修科目はほかありません。その意味で本学科卒業の「水準」は山縣先生が甘やかすことなくキープしてきてくださったように思っております。一方で、必修科目を落とすという点だけからみると「厳しい」先生なのですから、実はゼミの卒論では実に丁寧によく指導しているんじゃないでしょうか。私も私を知っています。同じ語学担当ということで、毎年お互いのゼミの卒論の口頭試問をしてきましたが、山縣先生のゼミ生の口頭試問では、細やかな指導を受け、長い時間一緒に考えてきたということがいつも伝わってきました。私には「こま丁寧な指導はできないなあ」と思っております。

私は先生の一年後に赴任して以来、先生の

お宅にお招きいただいたり、合宿研究会に車で一緒にさせていただいたり、院生とともに韓国旅行に行ったり、ずいぶん楽しい時間を過ごすことができました。しかし、それも先生が学部の多忙な役職につくようになってからは難しくなってきました。入試や教務、大学院関係の役職を連続して担当し、ついには学部長にも就任なさいました。この点からいうと、山縣先生は日文科の教員でもあります。それが同時に「人文学部」を支えてきた学部の大黒柱ともいえる存在です。役職の仕事には、こまごまとした事務仕事や、学科間の関係調整など様々なものがありますが、山縣先生はどの仕事も隙を見せず、きっちり、淡々と仕上げていらつしやいました。私などには想像もつかないほど大きなストレスと戦ってきたと想像しますが、その蓄積もあって早期退職を選ばれたのではないかと思います。学科教員としても、学部の一員としても、先生のご退職は寂しい限りです。

役職が続いていたこともあって、学科の行事「訪書旅行」には長くご参加いただけいていませんでしたが、この三月には久しぶりにおいでいただくことができました。山縣先生は「京都に泊まっているのに滋賀旅行」が定番、今年の参加者に話を聞くと、「きっちり時間を使い切った最高の観光ができた」ということでした。ああ、さすが山縣先生。乗り物に関する細かい時間調整と行き先の完璧なりさ

ず、これは旅行好きの山縣先生ならではのものです。以前語学の同僚だった佐野先生もそうでしたが、山縣先生は筋金入りの「鉄」です。韓国旅行に一緒にした折も、書店に飛び込んで「時刻表」を探しておいででした。学部新人生に配布する「News」という小冊子は人文学部教員による読書案内なのですが、山縣先生はこれまでずっと鉄道旅行に関する読書案内を書き続けておいででした。今年四月発行のNewsには「汽車旅の勧め・その七 終着駅」と題した文章が綴られており、昨年二〇二三年末の執筆時点でご退職を決心していたようなタイトル・内容でした。

個人的には、これまで同僚にずっといた「丸大日文科出身」の先生がいなくなるということも寂しいことです。私個人は同大言語学科出身でそのつながりからは少し距離がありましたが、いよいよ本学科も「多様性」の時代になるわけです。これまでの福大日文科の伝統を受け継ぎつつ、新たな学部の姿を模索すべき時期にきたということでしょうか。残された教員の中では一番年寄りになってしまおう私としては、もう少し甘えさせていだだきたかったというのが本音です。

(日本語日本文学科教員)

「本の人」高橋昌彦先生

須藤 圭

高橋先生、大変お世話になりました。

——そうは言っても、高橋先生と私との直接の出会いは、私が福岡大学に着任したときのこと、わずか四年をさかのぼるに過ぎません。私の専門が平安時代中期に成立した物語文学である一方、高橋先生のご専門は江戸時代中後期に活躍した学者の著述や伝記であり、研究分野も大きくかけ離れています。それでも、高橋先生との思い出は、枚挙に暇がないほどです。高橋先生は「本の人」です。そのことについて、書いてみたいと思います。

私が高橋先生のお名前を初めて目にしたのは、十年ほど前、『国立台湾大学図書館蔵「長澤文庫」解題目録』（国立台湾大学図書館、二〇一三年）の奥付だったと思います。当時勤務していた大学のゼミ旅行の行き先が台湾に決まったことから、「台湾に日本の古典籍があれば、ついでに見学できるかもしれない」と思って調べたところ、この本を見つけたのがきっかけでした。台湾大学に所蔵されている、質、量ともに膨大な長澤文庫の蔵書を一挙調査し、解説を付けた目録です。もちろん、高橋先生お一人での作業ではなく、数十人のチームでの共同作業の成果ですが、その主編としてお名前が掲げられているのが高

橋先生だったのです。

いま、あらためて、高橋先生のご業績を眺めてみると、こうした目録の整理が数多くあることに気づきます。目録を取りまとめるためには、幅広い知識が求められます。あるひとつの文庫、蔵書には、ごく限られた分野の本だけがまとまっていることは少なく、時代も、内容も、実に様々な書籍が入り乱れて存在しているからです。古今東西、あらゆる本に精通していなければ成し得ない作業ということができます。

研究者にとって、本は、必要不可欠な仕事道具です。だから、私たちは、専門分野の本を買い、関心のある本を買い、読まなければならぬ本を買い、そのすべてを読むことは、到底、不可能ですが、いつか使う日のために本を買い揃えています。それでも、手もとに集められる本には、おのずと限りがあります。たとえば、私の小さな書架を眺めてみても、並んでいるのは、源氏物語、源氏物語、そして、源氏物語——。浅薄な知識と同じように、書架の本も貧弱なものになってしまっています。源氏物語のことなら詳しいけれども、それ以外のことは分らない、そうした研究者の出来上がりです。しかし、高橋先生は、そうではありません。高橋先生と、先年ご退職された山田洋嗣先生、文化学科の関口浩喜先生、本学科の大坪亮介先生、そして、私と、何だか不思議なメンバー五人

で食事会をする機会が何度かあるのですが、私といえば、四先生の博識さにただただ呆然とするばかり。「え、そうなんですか!」「調べてみます!」と相づちを打つことしかできません。高橋先生の博識ぶりは、日頃のお話、会議の中でも感じるところですが、その蔵書にも、間違いなく反映しているに違いありません。

このことにかかわって、私が本当に驚嘆したエピソードがあります。福岡大学で開催された研究会でのこと、発表者が発表内容に深くかわる資料を紹介し、しかし、伝本も極めて少なく、詳しい調査が難しいことを述べた後の質疑応答の際、高橋先生が、「その本であれば、私も、一冊、持っています」と、なんと、肝心要のその本をお持ちになっていたのです。先生のもとには、数千、数万の蔵書があると伝え聞きます。高橋先生、本当でしょうか。

高橋先生が多くの学生から慕われていることも、書いておかなければならないことの一つです。学生に高橋先生の印象を聞いてみると、どの学生からも、「学生の名前をよく覚えていて、学問のことはもちろん、進路、人生、何を相談してもいつでも応じてくれる学生思いの先生」という答えが返ってきます。授業のはじまりに、いそいそとやってきて、楽しそうに授業をされるといふ話も聞きました。高橋先生ご自身が本当に楽しんで授業を

なされているからだと思えます。教員が楽しまなければ、学生にその魅力が伝わるはずはありません。古典文学は、古文で書かれていることから読み解くことが難しく、また、現代とは時代を隔てたものであることから理解の困難な内容が書かれていることも多くあります。古典文学の魅力をどのように伝えていくべきか。その「苦労があつたらう」とも、同じ古典文学を教える者として、痛いほどよくわかります。そのためでしょうか、高橋先生は、和本作りも、授業の課題として取り入れていて、これもまた、学生から思い出深い記憶として聞くことが多いものでした。先生がご退職されて和本作りの授業がなくなってしまうのは勿体ないと思い、私の授業で引き継いでいきたいと勝手に思っているのですが、はたして、上手に教えることができるでしょうか。

以上、ごくわずかですが、高橋先生と本にかかわるエピソードの一端を述べてきました。ところで、私の手もとは、江戸時代後期に書かれた源氏物語の小さな注釈書の写本があります。同じ写本が伝わらない孤本であり、その体裁から作者自筆本と考えて間違いない、他の注釈書には見ることのできない注説も多く書かれた一冊です。そして、その作者の名前も書かれていて、おそらく、福岡の学者と思われるのですが、調べても、なかなか核心に迫ることができないままです。「本の

人」高橋先生にお尋ねすれば、たちまちに正解にたどりつくことができると思いつつ、まずは自分なりの答えを導きだした後で、答え合わせをさせていただきたいと思っています。ご退職された後は、大学の煩雑な業務からも解放され、ますますご研究に邁進されることと思います。今度ともお教えいただくことを楽しみにしています。

高橋先生、本当にありがとうございました。
(日本語日本文学科教員)

山縣先生へ感謝の気持ちを込めて

竹中 洋樹

私は2002年4月に本学科へ入学後、3年次のゼミ選択の際、山縣先生のゼミを選択しました。その後2008年3月に博士課程前期を修了し、2008年4月から福岡大学職員として入職しました。

3年次に山縣先生のゼミを選択した際、方言を勉強したい、といった漠然とした思いはありましたが、先生がどのような研究をされ、私がどんな卒業論文を執筆するか、あまり深く考えていませんでした。

4年次は就職活動を優先し、ゼミ活動はそれほど参加していなかったです。ただ、就職するまでもう少し勉強を続けようという漠然とした思いのまま大学院へ進学しました。

明確とした目標が定まらないまま進学しましたが、山縣先生はこんな私に優しくも厳しく指導してくださいました。先生の研究室に行く度に、あまり進んでいない研究内容を持っていくことに大いに緊張していたことを思い出します。

山縣先生のゼミに所属していた方はご理解いただけるかと思うのですが、内容がとても丁寧で指導内容を詳細に記述してくださいましたメールが来る度、深く反省することを繰り返

し、多大なるお力添えのおかげで修士論文を執筆することができました。

卒業後、私が職員となって以降は、配属部署の上司に挨拶に来てくださり、昼食時にお会いした際や食事した際、仕事に対する悩み、葛藤を聞いてくれる度に心が軽くなっていました。

9年前に私の異動で職場が大学から離れ、日常にお会いする頻度が少なくなっても、季節が変わるたびにご連絡いただいております。コロナ禍となり、数年お会いできなかった時期があり、数年ぶりにお会いできた際は大変嬉しかったことを覚えています。

先生にご指導いただくようになってから約22年が経ちました。歴代ゼミ生の中でも学生時代の私は決して優秀ではなく、むしろご迷惑や気苦労ばかり掛けていたと思います。卒業論文、修士論文を執筆出来たのも本当に先生が指導してくれたからだと心から感謝しております。大学の教務事務で働くようになってからは、「指導」の視点を持ちながら真摯に向き合う先生のように、学生に対して接することを心掛けていました。

大学に先生がいてくださることが当たり前前でしたので、来年4月から大学にいないことは全く想像できません。緊張しながら受けた先生の研究室での指導も大変貴重な思い出です。

今も論文の執筆など大変お忙しくされてい

ますが、退職後はまずはひと休みされてください。これからもご指導ご鞭撻のほど、末長くよろしく願っています。

(〇二年入学・卒業生)

高橋先生の思い出―感謝に代えて

野口 智代

今年度高橋先生から「退職なので」と言われ、先生の退職を実感しています。

何を書くかと悩みましたが、先生との思い出と感謝を書こうと思います。

私が近世文学の面白さに気づいたのは、深めていくうちに見えてくる近世文学の人間味あふれた面白さに触れたためです。その面白さを高橋先生が教えてくれました。作品の書かれた背景について、あらゆる可能性を示唆しながら、いつも「フフフ」という笑顔で、伝えてくださいました。私の古典研究は高橋先生の講義から始まりました。

思い出は多く、調査に同行させていただいたことも思い出の一つです。とても贅沢な経験をさせていただきました。史料の情報をくみ取り、記録をすることはとても大変で、何度も高橋先生に目録の取り方を尋ねてしまいました。先生は史料の取り扱い方を丁寧に教えてくださり、この経験は後に一人で調査へ行つた際、とても役立ちました。今も史料と向き合う際は忘れないようにしています。

調査へは、対馬と台湾に同行させていただき、調査以外の思い出として、対馬では自然と魚のおいしさを堪能し、台湾では広い大学の構内を歩き、台湾の夜市、九份へと行き、

美味しい台湾の料理とお茶を飲んだことを覚えていてます。もう一つ、台湾で覚えていることがあります。台湾最終日に高橋先生、山田先生、当時の山田ゼミの先輩方、同期と食べた排骨麵です。排骨麵を食べられた後の先生方の表情、今でも覚えていてます。

高橋先生とは、よくお話をしました。研究以外の話題も豊富で、今昔のアイドルから歴史、サブカルまで本当に幅広く、以前先生の研究室で某漫画家の画集を見つけたときは、「原画展、行ったんだよね」と自慢気におっしゃられながら画集を見せてくれたことを覚えていてます。高橋先生には「興味・関心」のアンテナが縦横無尽に張り巡らされているのだと思っています。

さらに思い出すのは、高橋先生の研究室の「書庫だ」と思うほどの本です。本棚のどこにどのような本があるのか高橋先生に尋ねたことがあります。「全部じゃないけど、大体はわかるよ」と先生から並べ方の法則性を教えてもらいました。博士課程に入学してからは、本をお借りする機会が増えました。貴重な本も多い中、快く先生は貸してくれました。時には「多分家にあるよ」と、探して貸してくださることもあり、「僕も中野先生（中野三敏先生）からよく本を借りていたから」とおっしゃられていて、学生に貸すのは当たり前のように考えられていたのでしょうか。先生にお聞きしてみたかったです。

高橋先生に博士課程入学についてご相談をしたとき、「最近博士が少ないから嬉しいです」と指導教授を快諾していただいたこと、感謝しています。私は社会人大学院生として入学したため、毎週夜間の時間に講義、加えて途中コロナ禍となり、対面からオンラインへの切り替え、先生にはご負担をかけてしまうことが増えました。それでも、高橋先生は「大丈夫ですよ」と一言。先生が柔軟に対応してくださったおかげで、研究を続けることが出来ました。思い返せば、高橋先生はいつも灯台のように、研究の進む道を照らしてくださっていました。本当に感謝しています。

まだまだ先生から教わりたいことがたくさんあります。講義中、「僕もまだまだ知らないことが多い、先人はすごい」とおっしゃられる知識を吸収されようとする高橋先生を見ると、私はまだまだと思うことがあります。

先生、本当にお疲れさまでした。退職された後もお元気で過ごしてください。私は学んだことを生かせるよう、研究を続けていきます。

高橋先生、本当にありがとうございました。
(一九年入学・大学院博士課程後期)

ゼミ通信

林ゼミ

末武 春希

私が所属している林信蔵先生のゼミ（以下林ゼミ）は他のゼミと比べて少し特異なゼミである。現在、日本語日文学科には今年度で退職してしまう先生を含め10人の先生がいるのだが、それぞれ語学や古典文学・近現代文学など研究分野が分かれている。しかし林先生は日本の近現代文学と海外文学との比較や文学と音楽の相関関係などの研究をしているため、林ゼミに所属する学生も日本の文学とそれに関する分野との関係を研究をすることができる。

日本語日文学科の学生は3年次には2つのゼミに所属し、4年上がる段階でどちらのゼミで卒業論文を書くのか決めることになる。私は林ゼミと某ゼミに所属しているため、ここでは2つのゼミの比較をした上で林ゼミの特徴を述べようと思う。某ゼミでは3年であるうと前期から発表をすることになる。質疑応答の時間は十分に取られ、質問者がいない場合には先生が学生を指名し質問させるといった形になっている。この形式の良い点としては、発表者は早い段階から発表に慣れることができ、聞く側は質問を考えながら集中し

て発表を聞くことができる。学生からの質問を先生が補足して重ねて質問してくれることもあり、質問者側としても「そうそう、それが聞きたかったんだよ!」となる場合も多い。

一方、林ゼミでは3年の前期は発表が無く、先生による論文分析や4年の発表を聞く。質疑応答は何人かで話し合い、1つ以上の質問や意見を述べる形になっている。この形式の良い点としては先輩方の発表や先生の論文分析を通じて卒業論文や発表に使うレジュメの構成方法を学ぶことができ、自分ひとりでは疑問に思わなかった点でも話し合うことによつて気付くことも出来る。ひとりで研究に没頭したい人というよりは仲間と意見を共有しながら自分の意見を固めたい人向けのゼミだ。また林先生自身がチャージングな先生なので、先生と笑いのツボが合えば授業中笑いが尽きることはないだろう。具体的な例で言えば、少し分かりづらいダジャレを言ったり、先生が言い間違えた時には間違えた日本語に近い音のフランス語を喋り始めたりすることがある。

林先生のノリの良さや先輩たちが話しやすいお陰でどの席に座つても楽しむことができた。林先生のノリの良さは学科の先生たちの中でも特に目立ち、酔つたら立ち上がってワイングラス片手にオペラの曲を歌い始めたりオシャレな帽子を被り直してカメラに向かってキメ顔をしたりするなど一緒にいてとても楽しい。二次会でカラオケに移動すれば情感たっぷりにオペラ「カルメン」の闘牛士の Aria を歌い、フランス語の歌詞の途中では「お前の番だ!」とか「血まみれだ!」だとかセリフを挟むためカラオケの個室はさながらヨーロッパのオペラ座へと変化する。

他に言いたいことといえば今年度のゼミ旅行についてなのだが、ゼミ旅行の面白エピソードに関しては4年の先輩が書いてくださったっている文章があると思うので、詳しい話はそちらを読んでいただきたい。ここではゼミ旅行の日程がどのように決められていくのか軽くご紹介しよう。今年度はそもそもゼミ旅行が開催されるかすら危うい状況であったため行きたい気持ちの強かった私が行くことを提案したのがはじまりである。学生に参加不参加のアンケートをとり参加したい人の予定や行きたい場所の聞き取りなどを経て先生に提案するようになっており、企画の段階では先生はあまり関与してこない。学生のみで計画を立てるのはかなり大変だが、その自分たちの行きたい場所ややりたいことを提案

できるため、より学生が楽しめるようなゼミ旅行に行けるのだ。

まともに入るが、今回のゼミ紹介文で私が何を言いたいかといえば、困つたらとあえず林ゼミを第1志望にしておけば間違いはないということだ。来年度、これを読む貴方とお茶目な先生と愉快な仲間たちが集う林ゼミで会えることを楽しみにしている。

(二二年入学・学部生)

畑中ゼミ

野添 亜純・下舞 乃暖

私が所属する畑中先生の近代文学演習では、大正時代から現在までに書かれた短編小説を研究しています。「卒業論文の作成に必要な知識、調査能力、思考力、論述能力を身につける」という目標を掲げ、小説の読解と議論を楽しんでいきます。ガイダンスの時は、畑中先生や四年生が発表資料の作成方法、全集やインターネット資料の活用方法を細かく教えてくださいたいです。授業では、約三〇分間は発表者一人が口頭発表し、その後約六〇分間は発表者以外の受講者が質問や意見を述べる議論の時間です。畑中ゼミでは現在、四年生一〇名、三年生一五名の計二五名が在籍しています。

発表の作品は受講者が自分で選びます。前期四年生の発表では夏目漱石「夢十夜」、太宰治「皮膚と心」、三島由紀夫「憂国」などの作品が取り上げられました。発表資料を作る時は、自分が取り上げた作品を読み込み、作品内で疑問に思うことを見つけた上で、どのような先行研究が行われているか調査します。そして、先生と相談しながら、独自の考察テーマを立ていきます。考察テーマは、登場人物に着目したり、場面背景に着目したり、表現方法に着目したりと

様々です。作品について、先行研究で論じられていないことを見つけ、独自の考えを持つことは、大変な作業になりますが、筋道を立てて自身の論を主張していく作業には楽しさを感じることができます。

発表当日は、発表者以外も作品を事前に読んできた上で、発表内容を踏まえてどんなことでも気楽に質問し、発表に対する自身の意見を出し合います。ゼミ学生の全員が、このようなやり取りを充実させることで、発表の良い点や改善すべき点を見つけることができ、作品が持つ読みの可能性についてさらに考察を深めることができます。また、発表を聞いていることができません。また、発表を聞いていると、「こういう着眼点もあるのか」という新たな発見があるので、もう一度その作品を読みたくくなります。

また、畑中ゼミでは発表後にレポートを提出します。そのため口頭発表後の発表内容をふまえた受講者全員での議論がとても大切です。口頭発表の際に受けた指摘を反映させ、論文スタイルでまとめ直し、読みをさらに深めます。

担当の畑中先生は、とても親身になって指導して下さる先生です。発表前の相談では、考察テーマについて一緒に考えてくださり、楽しく充実した時間を過ごすことができます。発表資料の作成の過程で分からないことがある時は、優しく教えてくださいます。

前期には、四年生の先輩方が歓迎会を開いてくださり、先生や同級生、先輩達と楽しい時間を過ごすことができました。これからも親睦を深められればと思います。

畑中ゼミでは、気楽に質問し、近代文学作品の持つ読みの可能性を深く考えることで、楽しく充実した時間を過ごすことができます。近代文学に興味がある人はぜひ、畑中ゼミで私たちと一緒に研究しましょう。

(二二年入学・学部生)

訪書旅行記

勝原 唯・泊 南

令和五年度の訪書旅行は、引率に中野先生、山縣先生、高橋先生、永井先生。そして、二十五名の学生が参加した。

一日目は班別行動で、私は中野先生の班になった。中野先生に、最初に訪れる場所を尋ねた時のヒントとして出されたのは「須藤先生に関係のある場所」だった。私は須藤先生と言われて思いつくのが『源氏物語』しかない、班の子と考えていたが分からなかったため、無念のギブアップ。その後、先生が答えを教えてくださいました。行き先はまさかの「立命館大学」。班員全員で驚いた。立命館大学へは昼食を食べに行った。バスの中で、友達とメニューを見ながら何を食べるかで盛り上がりがあった。人生で訪れることはないだろうと思っていた立命館大学に着いたときは、かなりテンションが上がった。春休みなのもあって食堂にはあまり人がいなかった。私が食べたチキン南蛮はすごく美味しかった。昼食を食べた後は、立命館大学国際平和ミュージアムへ。ボランティアや学生スタッフの方々が、案内や説明をしてくださった。館内には、戦争に関する資料の他に、当時の人々が暮らしてい

た部屋の再現や実際の持ち物などが展示されていた。実際に戦争を生き抜いた方の話はとても貴重だったし、今現在行われている戦争についても考えさせられた。平和ミュージアムの後には、仁和寺に行った。仁和寺では、普段は見られない本尊の阿弥陀三尊の裏側にして「裏堂」を見た。お坊さんが壁画の説明をしてくださったが、最後に不動明王などが印刷されたファイルなどが売店に売っている、という営業が入ったため、その印象が強すぎてあまり他のことは覚えていない。

夕食の時間の少し前に泊さんと一緒に夕食会場に向かうと、隠れている人物を発見。それは、まさかの江口先生だった。次の日に、京都の大学に所用があたりだったそうだが、サブライズで来てくださったらしい。これには私たちがびっくり。他の人たちが集まりだして、江口先生を見つけたときもとても驚いて、混乱していた。夕食は江口先生とも御一緒した。

夕食の後は百人一首大会が行われた。一回戦目は、班ごとで行った。読み手は高橋先生が務めてくださった。一回戦目は強い人弱い人がごちゃ混ぜだったので、結果は班の中でのかなりの差が出た。ちなみに私は、ゼロ枚で班の中で最弱だった。二回戦目は、一回戦の結果を基にグループを分けた。そうすると、上位グループと下位グループで驚くほどの差が出た。高橋先生が上の句を読み上げてくだ

さっている途中で「パンツ」と音がするのが、上位グループ。それから十秒ほど後で静かに札をとるのが、下位グループ。同じ空間にいるのに、時間の流れが違った。(ちなみに毎年、百人一首大会で面白いのは上位グループではなく、下位グループらしい。確かに、下位グループは百人一首をしているとは思えないほどのスピードで、面白かった。)その後、全ての札を取り終わり、結果が出た。驚くことに、第一位から三位は全員弓道部。部活で鍛えられた集中力が強さの秘訣だったのかも。しない。

百人一首大会が終わった後は、女子会をした。自分たちでお酒を買ってきて、それを飲みながら、おしゃべりしたり、UNOをしたりした。私はUNOのルールがよく分かっていたが、周りの子たちが優しく教えてくれた。百人一首で二位になった子は、景品の中に入っていた知育菓子「たのしいおまつりやさん」をしていた。箱の裏の説明を見ながら、真剣に、そして楽しんで、チョコバナナやリング船を作っている姿を見ていると、景品を選んだ身としては、とてもうれしい光景だった。また、普段話さない子たちとも話せて、とても楽しかった。ちなみに、この女子会は深夜一時まで続いた。隣の部屋が中野先生だったので内心ヒヤヒヤしていたが、次の日に注意されなかったのはよかった。

二日目は全員で京都府立京都学・歴史館



へ。東寺百合文書や足利尊氏御判といった古文書の解説に挑戦した。数多くの国宝や重要文化財を目にする貴重な経験を得ることができた。昼食後は、京都府立陶板名画の庭へ。陶板名画の庭は「最後の晚餐」や「最後の審判」など、全八点の名画が陶板画として屋外に展示された施設である。この日はあいにくの雨であったが、空の薄暗さや雨音、少しの肌寒さが鑑賞の静けさを際立たせ、むしろ好ましかったと個人的には思っている。絵画庭

園での鑑賞後、隣接する京都府立植物園へ移動し、園内を散策した。中でも日本最大級である観覧温室は非常に見ごたえのあるものだった。色鮮やかな植物や見たこともない形をした植物、全ての植物が目新しく何枚も写真を撮った。

植物園で行う予定であったレクリエーションが雨により中止となったため、予定より少し早く旅館に戻った。夕食まで時間があるということで、旅館内でレクリエーションを行うおうということになったが、旅行委員で用意したレクリエーションは屋外を想定して用意したものだった。何か良い案はないかと周りの友達にも相談し、何とか新しいレクリエーションを企画することができた。万が一盛り上がらなかったらという不安もあったが、それは杞憂に終わり、レクリエーションはなかなかの盛り上がりを見せた。一緒に案を考えてくれた友達や企画を盛り上げてくれた友達、あの場にいた皆には本当に感謝している。

夕食後の懇親会への参加は一時間ほど遅れてしまい、来た時には高橋先生が部屋に帰られるところだった。先生を引き留めようと試みてみたが、あえなく振られてしまった。会には十数名の学生が参加しており、中野先生もいらっしやう。それぞれが好きに過ごしていたが、先生は数名の学生と恋バナを展開していた。もちろん先生への追及がない訳がなく、奥様との出会いや衝撃エピソードを聞

くことに成功したが、先生が帰られようとしたときの引き留めはこれもまた失敗に終わった。私は最後まで残れなかったが、会は一時頃には解散したと朝食時に耳にした。

訪書旅行最終日は自由行動。思い思いに京都を散策した。集合時にはたくさんのお土産を持った皆の姿から、それぞれが旅行を楽しみ切ったのだろうと心弛びながら福岡へと出発した。

最後に、中野先生をはじめとする先生方のご尽力により、令和六年度の訪書旅行も無事終了することができた。訪書旅行という貴重な機会に旅行委員として参加できたことは、私にとってかけがえのない経験となるだろう。この経験と思い出を糧に今後の学生生活も励んでいきたい。

(二二年入学・学部生)

ゼミ旅行記

田子森やよい

林ゼミのゼミ旅行では一泊二日で大分県由布市に滞在した。当時三年生だった私は同級生や林先生はもちろん、少し距離を感じていた四年生とも親しくなりたいと思い、期待を胸に参加を決意した。

初日はシャーロックホームズのような帽子を被った林先生とともに金鱗湖で美しい自然や生き物を観察し、金鱗湖を背景に全員で集合写真を撮った。その際に湖で見かけた紅白で色鮮やかな鯉がとても印象に残っている。



その次は観光地を見て回り、温泉郷の風景や食事や地元の方と交流を楽しんだ。友人と一緒に注文した肉巻きおにぎりの味が今でも忘れられないほど美味だった。地元の方々とても親切に接して下さり、家族や友人への土産に色々なアドバイスをさせて頂けた。その結果友人は地元の焼酎の三本セットを、私は全国梅酒品評会で銀賞を獲得していたゆず梅酒と柚子胡椒を購入した。自宅に帰って実食してみるとゆず梅酒は柚子の爽やかな風味にさっぱりとした口当たりで下戸な私でも飲みやすく、柚子胡椒は程よくピリツとしていて豚汁やそうめんの薬味にぴったりだった。由布院に行った際は是非とも買ってみて頂きたい。



夕方には宿泊施設の近隣にあった由布院特有の温泉に入ることになった。入浴料大人一人二百円というのはとても衝撃だった。蛇口からそのまま適温のお湯が出てくるのではなく、自分で源泉の湯を冷水で適温に調節しな

ければならないという昔ならではの仕組みに、タイムスリップしたようでワクワクした。温泉では先輩方とプライベートな話題から学業の話まで会話をすることができた。それが、私を感じていた先輩後輩の壁が少し取り払われ、ゼミにおいて活発に議論できるきっかけになったように思う。

温泉から宿泊施設へと戻ると林先生が料理の準備をされていた。元々先生がフランス料理をふるまってくると仰られており、フランス料理を食べたことのなかった私はとても楽しみにしていた。しばらくすると先生が料理を持って来て下さった。ドライイチジクと



フォアグラの料理や真鯛と洋梨の料理など、食べたことのない食材が多かったがとても美味しかった。



今回のゼミ旅行では、主に大分県についてや料理に多く触れることができた。私の卒論のテーマではないが、次に論文を書くことがあれば海外料理や大分県が舞台の作品などを取り扱いたいと思った。

(二一年入学・学部生)

卒業生通信

福岡大学に学んで

パトリック・パーマー

私は2023年に日本語日本文学専攻で博士課程後期を修了しました。2020年3月に他大学から編入してまもなく、コロナ禍による影響で多くの講義がオンラインへと移行したため、キャンパスに通う機会は限られていました。しかし、振り返ってみると、通常の大学院生活とは異なる環境での学びは、私にとって非常に貴重な経験となったことと実感しています。福岡大学で学んだことの一つは、視野を広げることで研究の深みや面白さが増すということです。日本語日本文学専攻では、古典から近代に至るまでの文学だけでなく、古語や琉球語、現代語に至るまで、日本の言葉・文化・文学に幅広く触れることができます。この多様性に富んだ環境の中で、毎日の研究活動が刺激的で、研究を進める原動力となりました。また、指導教員のサポートのもと、学内外の研究会や学会に積極的に参加する機会にも恵まれました。オンラインでの交流が主流となった時期でしたが、それでも多くの研究者や学生と意見を交換することができ、研究に対する視点が広がりました。福岡大学での学びは、私にとって大きな成長

をもち、現在の研究・教育活動を可能にしました。卒業後の現在は、岡山県で教員として働いていますが、福岡大学で得られた学問的探求心と広がった視野を活かしながら、学生たちと共に新たな学びの道を歩んでいます。

(二〇〇年大学院入学・卒業生)

人文学部同窓会について

村上(日野) 鍾子

このたびは福岡大学人文学部同窓会の副会長兼書記として、山縣先生より同窓会をアピールする機会をいただきましたので「人文学部同窓会」の回し者としてお話しさせていただきます。訪書旅行の日文初のかたる大会でも藤井先生の授業の前に配られるチョコレートの話でも三嶋先生のお部屋でいただくコーヒーの思い出でもなく、がっかりされる方もいらつしやるかと思いますが、しばしお付き合いください。

とはいえ、きっかけは三嶋先生でした。卒業する間に「お前は民間(就職)だったよな。じゃこの代表でいいな。何かあるかもしれないぜ」と格好良く渡された謎の紙切れ。それが同窓会に足を踏み入れたきっかけでした。当時は人文学部内の学科持ち回りで学部代表を選出する方式だったように聞きましたが、運が良いのか悪いのか、日本語日文学科が当番の年だったようです。紙に書いてある内容を受け出かけていった西日本新聞会館の会議室。よくわからないうちに大学同窓会「有信会」の代議員になっていました。

私は平成十五年卒なのですが、このあたりからおそらく三つの会の案内がくる世代になっていったのではないかと思います。

(一) 福岡大学同窓会「有信会」(終身会費に ついては学年により異なるため要問合せ)

(二) 福岡大学人文学部同窓会(現在…終身会費五千元)

(三) 福岡大学日本語日文学部 日本語日文学会(現在…終身会費二万円)

ご説明しますと(一)については福岡大学全体の同窓会です。全学部横断の巨大な組織です。有信会公式ホームページの川畑理事長のお言葉によりますと「一般社団法人福岡大学同窓会有信会は、昭和十二年に発足し、本年で八十七年目を迎える長い歴史を持つております。現在、会員数約二十八万人を擁し、九つの学部同窓会、六十二の地域支部及び三十六の職域支部で構成」されているそうです。

そして(二)が前述の「九つの学部同窓会」と言われるもののひとつ「人文学部」の公式同窓会です。大変遺憾ながら当同窓会は九つの学部同窓会の中で最も代議員の人数が少ない組織となっています。他学部ではなんと選挙でその席が争われることもあるそうで、参考まで商学部ですと代議員定数百二十席に対し百三名。対する人文学部は定数四十席に対し九名。ひと桁台は唯一、人文学部のみとなっております。

(三)については我々が日本語日文学科。こちらは「同窓会」ではなく「学会」となっ

ていることにお気づきでしょうか。在学生・卒業生であれば学会の一員になっているということですが、人文学部の中で唯一だとうかがっています。卒業論文が必須であることもあいまつて、私は心の中でいつも「人文学部の鑑」と密かに誇らしく感じています。

さてこれらの違いが今は理解できますが、卒業時はほんやりしておりまして(三)の日文学会員となると同時に三嶋先生のご指示で向かった先で(一)有信会代議員に任命され、有信会と勘違いして行った(三)人文学部同窓会の会議で松花堂弁当をいただいた瞬間に人文学部同窓会の代議員になってしまったわけです。

同窓会の構成と私の同窓会参加の経緯について、いささか冗長なご説明となりましたが、ここでさらにお伝えしておきたいのが現在の人文学部の実態です。八学科で構成されていることをご存知でしょうか。

文化学科(百)／歴史学科(七十)／日本語日本文学科(七十)／教育・臨床心理学(百十)／英語学科(九十)／ドイツ語学科(五十)／フランス語学科(五十)／東アジア地域言語学科(六十五)

括弧内の数字は入学定員です。総計六百五名。後発の学科ながら我々に迫る勢いの東アジア、最も新しい学科にもかかわらず最強の勢力を誇る教育・臨床心理について、卒業生の皆さまの中にはご存知ないという方もいらっ

しゃるのではないのでしょうか。そして、残念ながら両学科の卒業生が「人文学部同窓会」の代議員にいらっしやらないのが我々役員の昨今の悩みのタネでございます。一度、勇気を出して某学科の卒業生をスカウトしたのですが「同窓会になにか意味がありますか？」と哲学的な香りすらする問いを返され撃沈しました。

ここで本題に入ります。人文学部同窓会では他学科卒業生の先輩・後輩(少ない)の方々と運営活動を通して交流しながら、十年に一度の「周年行事」という大きなミッションに向かって活動をしています。卒業生のための同窓会・懇親会はもちろん、在学生の支援として「キャリア形成支援セミナー」を行うなど、地味な：いえ、地道な活動を続けています。

活動の一例として、毎年秋ごろ在学生向けに実施する「キャリア形成支援セミナー」についてお伝えします。同窓会幹事の前田司さん(文化学科卒/株式会社梓書院)による「人はなぜ本を読むのか出版社が語る読書のすすめ」というテーマの回は、福岡大学中央図書館一階の多目的ホールにて人文学部と人文学部同窓会の共催で行われました。終了後は講師や卒業生と学生の対話も活発に行われました。

最近ではオンラインミーティングも可能となり、メールやSNSで連絡も楽にできるよう

になりました。何かを犠牲にしなければならぬような運営方法ではなく、皆で助け合っで持続可能な方法で「楽しくやりましょう」とおっしゃってくださる山下哲雄会長(ドイツ語卒)をはじめ、皆さんが思いやりをもって活動されていますので、もし同窓会に関わるのは難しいのではないかと考えている方がいましたらご安心ください。

また、他学科の卒業生と一体何を話すんだろう：と不思議に思う方もいらっしやると思っています。各学科に個性があり、確かに日文とは違うカルチャーも感じますが、総じて「この現象の文化的な背景は：」「歴史的には：」「この言葉の語源は：」「ドイツ語では：」など、普段の生活ではあまり聞かないような会話も自然と飛び交い「人文学部」ならではの共通の感覚や話題に花を咲かせることもしばしばです。この環境は、私にとってある種の癒しとなっていることに気づいた今日この頃です。そして先輩方が次々と闘病、介護、家族との死別、相続、再就職、ボランティアなど様々な出来事やライフステージをポジティブにひと足先に進んでいかれている背中を見て、大変勇気づけられ、勉強になります。そしてバリキャリアの後輩からも最新情報や業界知識を教えてもらい、刺激を受けています。

もし人文学部同窓会の活動にご興味を持っていたら、大別すると以下の四つの活動がありますので、何か少しでも

関わっていただけると幸いです。

(一) 在校生支援活動
(二) 広報・スカウト活動

(三) 同窓会運営事務(事務や会計など)

(四) 懇親会・交流会運営または参加

参加希望の方は以下、メールや公式SNSにてお気軽に問合せください。

info@fukuoka-human.jp

福岡大学人文学部同窓会ホームページ

http://fukuoka-human.jp/

福岡大学人文学部同窓会 Facebook

https://www.facebook.com/fukudaijinbun/

福岡大学人文学部同窓会 LINE マカウント

https://lin.ee/SEZQbfx

福岡大学人文学部同窓会 X (旧 Twitter)

https://twitter.com/fukudai_jinbun

編集後記

▽「山麓通信」第三七号をお届けします。今回の編集担当は畑中ですが、誌面構成と幾つかの執筆依頼は、前任の山縣先生が引継ぎまでに終えていらっしました。作業を進めるなかで助けていただいた場面も数えきれません。今号が恙なく発行できましたのは、ひとえに山縣先生のおかげです。

▽前号は三嶋譲先生追悼号でしたが、今号は図らずも清水孝純先生を追悼する号となりました。四月三日に(逝去されたとの報に接し、学科では先生のご功績を偲びつつ、追悼のための準備を始めました。清水先生との思い出を多くお持ちの本学科元教員・大嶋仁先生(福岡大学名誉教授)、学科を越えて親しく交流された歴史学科元教員・森茂晁先生(福岡大学名誉教授)のお二人に追悼文をご寄稿いただいております。年代的に清水先生を存じ上げない会員も少なくありませんが、追悼文をつうじてお人柄に触れることができます。両先生におかれましては、急なお願いにもかかわらずご快諾くださり、誠にありがとうございます。

▽本年度をもって、山縣浩先生と高橋昌彦先生がご退職なさいます。今号には、両先生から文章を頂戴しました。また、学科とともに

過ごしてきた教員二名に加え、山縣ゼミの卒業生で、福岡大学筑紫病院に勤めていらっしやる竹中さんと、高橋ゼミを卒業後、大学院生として指導を受けてこられた野口さんから、それぞれ先生への思いを綴る文章をいただきました。改めて御礼申し上げます。

▽個人的な思いを少々。私の研究室は高橋先生の研究室のお隣、山縣先生の研究室のお向かいです。着任してからの三年弱、先生方の気配に触れる折、また何げない会話のうちに、九大時代の記憶を喚起されることが度々ありました。専門分野は異なりますが、先生方の後輩として、長く残って欲しいもののできるだけ多く残せるよう努力いたします。

▽今号の村上(日野)さんの寄稿文を通じて人文学部同窓会に興味をもった方は、ぜひお問い合わせください。在学生向けの支援など活動の継続にご協力いただけると幸いです。

▽第二五号から始まった葉書通信・オンライン通信ですが、今号は誠に残念ながらお休みさせて頂いたことになりました。学会を二月に開催するため、出欠のご連絡をいただく時期が例年よりも遅くなったためです。次号には、二年分のお便りをご紹介できればと考えております。教員一同、楽しみにしておりますので、お気軽に近況をお知らせください。

福岡大学日本語日本文学会

令和六年度役員

会長

永井 太郎 (学科主任)

運営委員

衣畑 智秀 (教員・会計)

須藤 圭 (教員・庶務)

畑中 佳恵 (教員・編集)

石丸 悠平 (大学院博士課程前期)

会計監査

林田莉彩子 (大学院博士課程前期)

向井 克年 (卒業生)

福岡大学日本語日本文学会会則

第一条

本会は福岡大学日本語日本文学会と称する。

第二条

本会は事務局を福岡大学人文学部日本語日本文学科研究室内に置く。

第三条

本会は会員の促進と相互の親睦をはかることを目的とする。

第四条

本会は、前条の目的を達成するために左の事業を行なう。
1 研究発表会、講演会などの開

催。

2 機関誌、会報などの発行。

3 その他本会の目的達成に必要なと認められる事業。

第五条

本会の会員は、本学人文学部日本語日本文学科および本大学院人文学部専攻の教育職員および元教育職員、在学生、卒業生をもって構成する。また、本学関係者で本会の趣旨に賛同するものは会員とすることができ、
本会に左の役員を置く。

第六条

1 会長 一名

2 運営委員 若干名

3 会計監査委員 二名

第七条

会長は会の代表として会務を統べ、委員は会務を執行する。

第八条

会長は本学日本語日本文学科代表を当てる。また他の役員は会員の互選によって選出し、会長がこれを委嘱する。

第九条

役員の任期は一年とし、再任を妨げない。

第十条

本会は年一回総会を開催する。なお、必要に応じて臨時総会を開くことができる。

第十一条

本会の経費は、会費、寄付金、その他をもってこれに当てる。

第十二条 本会の会費は入会時に二万円を支払うものとする。

第十三条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第十四条 会則の変更は総会の議を経て行う。

付則 本会則は昭和六十二年四月一日から施行する。

平成六年一月九日一部改訂。

平成二十三年四月一日一部改訂。

山麓通信 第三七号

二〇二五年一月一〇日印刷

二〇二五年一月一九日発行

〒八一四一〇一八〇

福岡市城南区七隈八丁目一九番一号

福岡大学人文学部日本語日本文学科内

福岡大学日本語日本文学会

印刷所 城島印刷株式会社

福岡市中央区白金二丁目九番六号

